



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	奥寺龍溪のボーイスカウト論に関する研究：英国規範の受容とアダプテッド・アスレティズム [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石立, 克己
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16306号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95222
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	ISHIDATE_Katsumi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：石立克己

学位論文題名

奥寺龍溪のボーイスカウト論に関する研究
—英国規範の受容とアダプテッド・アスレティシズム—

本研究はボーイスカウト運動にみる英国的スポーツ規範の日本的受容を奥寺龍溪（1877－1936 年）のボーイスカウト論を通して明らかにすることを目的とする。その際、英国的スポーツ規範、「アスレティシズム」の階層縦断的および文化横断的拡大に着眼し、アダプテッド・アスレティシズムに依拠して、奥寺のボーイスカウト論の分析を試みた。

奥寺は現在のボーイスカウト日本連盟の前身である少年団日本連盟（1922－1941 年）にて主事、参事、健児部国際班長を務め、100 編以上のボーイスカウト論に関する記事、6 冊の単著を執筆し、日本におけるボーイスカウト教育の理論形成に貢献した人物として知られている。

アスレティシズムとは 19 世紀後半の英国で確立したエリート中等教育機関、パブリックスクールのスポーツ教育イデオロギーを意味する。前世紀転換期におけるアスレティシズムの可塑性を分析した研究は、スカウティングを含む社会教育の果たした役割に言及し、C. Hickey は「アダプテッド・アスレティシズム (Adapted Athleticism)」という方法論上の概念を用いて、これまでエリート教育と結びつけられてきたアスレティシズムを初等教育やボーイスカウト運動を含む社会教育を通じたルートから補強した。このアダプテッド・アスレティシズムとは、第一次世界大戦期の総力戦体制の中で、アスレティシズムが労働者階級に適合し、普遍化したことを説明する際の方法論的概念を意味した。

しかしながら、階層縦断的な労働者階級への伝播と大英帝国を越えた文化横断的伝播の双方にみるアダプテッド・アスレティシズムを意識しつつ、スポーツ教育思想としてのアスレティシズムが、スカウト運動を通して日本に伝播した過程の詳細については、これまで明らかにされていない。それゆえ、本研究では奥寺のボーイスカウト論を、英国内において階

層縦断的な伝播を通して消化された「市民教育としてのアスレティシズム」（垂直方向）の大英帝国外への横断的な地理的拡大（水平方向）として論じることに意義を見出した。

本論文は第一部と第二部から成る。「第一部 ボーイスカウト運動と奥寺龍溪」では奥寺がどのような教育的影響の下でスカウト論に関心を抱くに至ったのか、彼がスカウト運動と出会う以前から英国の市民教育について学び、スカウト運動に傾倒するに至るまでの過程を 19 世紀後半の英国の市民教育およびスポーツ教育思想との関わりを通じて論じた。

「第一章 ゲーム崇拝と銃後のアスレティシズム」では、英国におけるボーイスカウト運動を通じたアスレティシズムの変容と拡大過程、奥寺がボーイスカウトと出会う以前に接触した英国由来の市民教育理念について論じ、以後の章で展開する奥寺のスカウト論が「英国由来のスカウト教育の日本への到来」を意味するだけでなく、スポーツ教育思想、アスレティシズムが英国内で市民教育に消化され、大英帝国を超えて普遍化したという横断的な拡大とも関わることを示した。

「第二章 英国規範の受容過程」では青年団中央部発行の定期刊行物『帝国青年』（1916－1922 年）の記事分析を通して、奥寺のスカウト教育論の形成過程について明らかにし、「第三章 『列強少年の社会教育』（1923 年）にみるスカウト・ゲーム及び「遊技」に関する研究」では、スカウト・ゲーム、「遊技」の陶冶性を重視した奥寺のスカウト教育論を、奥寺龍溪著『列強少年の社会教育』（1923 年）における記述をもとに分析した。

以上を通じて、第一部では英国規範の受容の問題を踏まえた奥寺のボーイスカウト論の形成過程と遊技に根ざす公民教育の理論を解明した。

第二部「国際主義と奥寺龍溪」では、日本のボーイスカウト運動を分析する際の階層縦断的側面と大英帝国の外で展開された水平方向の問題を合わせたアダプテッドな方向性の変容について論じた。すなわち、奥寺のボーイスカウト論を戦間期における国際主義の影響とその後の変化の観点から論じた。

具体的には、第四章「ボーイスカウト運動の国際主義と奥寺龍溪」において戦間期のボーイスカウトにおける「国際主義」に関する議論を整理し、奥寺が英国の市民教育に基づき、日本においてスカウト運動を通じて国際主義の理念を浸透させようとしたことについて論じた。近年、特に海外に見られる研究は、ボーイスカウトの創始者や国際本部の意図に基いて、国際主義自体を階層化するだけでなく、植民地や周辺諸国が参加する中で生まれた運動の独自性に注目する傾向がある。これに対し、日本では、一国史の脈絡に基づく分析が主流であったため、本研究では奥寺龍溪著『ボーイスカウトの精神』（1922 年）及び「採用か脱

化か」(1933 年)を用いて、スカウト運動を通じた奥寺の国際主義について詳述した。その結果、彼の国際主義とは、日本独自の形に「適応 (アダプテッド)」させることを踏まえた普遍的な国際主義の必要性を説いていたことが明らかになった。

第五章「ファシズムへの抵抗」では、英国パブリックスクールの教育を継承し、国際主義を重視していた「遊技」に基づく奥寺のボーイスカウト論が 1930 年代においてどのように変化したのかについて論じた。特に、1934 年から 1936 年にかけて『少年団研究』に掲載された奥寺による連載「訓練の組立」「訓練の仕組」を分析した結果、少年団日本連盟内部に国家権力が介入する中においても、ヒットラー・ユーゲントはボーイスカウト運動に馴染まないとして批判し、スカウト運動を通じた英国の「ボランティアの伝統」に基づく自主性や公民教育を強調し、「適応されたアスレティシズム」を維持する必要性を説き続けていたことが明らかになった。

本研究にて検討した奥寺におけるボーイスカウト論は以下のように総括できる。奥寺は黎明期の日本のスカウト運動の理論形成に貢献したとされてきた。本研究は奥寺の著作の詳細な検討を通じて、アスレティシズムが日本においてもボーイスカウト運動を通じた公民教育として機能することで、「英国のエリート教育機関からの思想伝播」であったという従来の単線的な説明を超える視点を提示することにつながった。加えて、少年団運動が国粋主義化する時期の奥寺のスカウト論を分析することで、彼の国際主義が単なる普遍主義でもファシズムへの迎合でもない、スカウト訓練を通じた「独自の国際主義」、「独自のアダプテッド・アスレティシズム」であり、遊技教育を単位とした近代の自治のしくみと結びついていることが明らかになった。

しかも、「独自のアダプテッド・アスレティシズム」を主張しても、奥寺の教育論の核心には不変的な原理としての「余暇の訓練」、すなわち、「深奥難解の科学ではなく、愉快で教育的なゲーム」、「遊技による教育」へのこだわりが存在した。

さらに、各国の思惑とナショナリズムが交錯する外交的な国際協調主義の中で生まれたスポーツ教育による国際平和主義が、奥寺龍溪のようなボーイスカウト論者によって、ボーイスカウト運動の意義として普及されたことは大英帝国から遠く離れた日本におけるボーイスカウト運動の歴史とアスレティシズムの世界史を結びつける重要な発見であった。